たかさご史話 ⑬

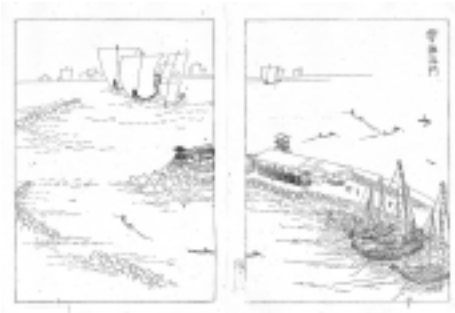
～水上から見た近世の高砂（１）～

鉄道や航空機が発達した現代社会では忘れられがちですが、日本の歴史上海や川は重要な働きをしてきました。特に物を多量かつ迅速に運ぶ手段としては、船による水上輸送が長らく唯一のものでした。

さて江戸時代の船といえば、大坂―江戸間を運航した菱垣廻船・樽廻船といった数百石から千石を超える大型船が有名ですが、最近の日本史研究では小型の民間商船が脚光をあびています。たとえば、東日本の日本海沿岸から阪神地方まで米や魚肥などを運び、帰り荷に上方の商品を持ち帰った北前船。また伊勢湾を本拠に関東から九州に及ぶ広い海域で各地の物産を買積みしては売るという商売をした内海（うつみ）船。こうした商船は各地に古くからあったと考えられますが、特に江戸中期以降には瀬戸内海の港々を本拠・寄港地として活躍したことが明らかで、商品流通の上で革新的役割を果たしたといわれます。

近世の高砂は、瀬戸内海沿岸、そして加古川河口の港として、二重の意味で船に縁の深い町でした。寛文八年（一六六八）付の『播州記録　私覚集』（内閣文庫蔵）という史料によれば、高砂には姫路藩域の全商船数の二二％にあたる二六六艘の商船があり、その七割は九五石積以下の小型船でした。浦水主（うらかこ）といわれる船員も七二一人と、藩域最多の数です。こうした高砂の歴史を知るには、陸からだけでなく水の上から見る視点も必要のようです。

（高砂市史編さん専門委員　中川　すがね）



響灘海門
「紀勝余韻」より